

相馬で大震災総追悼法要

東北教区相馬組（松山善之組長）は7月9日、福島県相馬市の葬儀会館で東日本大震災物故者総追悼法要を営み、門信徒や遺族ら200人が参拝した（写真）。大震災のお見舞いで同県を訪問されたご門主が参拝され、お見舞いのお言葉を述べられた。

同組では3月11日の地震と津波で沿岸部を中心に多くの門信徒が被災。家族の安否や被災状況もつかめない中、原発事故により避難指示や退避命令が出され、大半が一時、避難生活を余儀なくされた。同組10カ寺のうち5カ寺が原発から20キロ圏内で立ち入り禁止の警戒区域にあり、今なお7カ寺の住職や寺族をはじめ、多くの門信徒が県内外の仮設住宅や避難所に身を寄せ、互いの安否もつかめない

組を挙げ実施、離散した門信徒一所に

い状況が続いている。このため、離散する門信徒が一所に会して思いを共有し、寄せられた多くの支援に対する感謝の意と、復旧・復興に向けての決意を新たにしよう、震災後初めて組をあげての法要を営んだ。

東北教区災害ボランティアセンターが会場設置や受け付けなどをサポート。仏具を持参できなかった参拝者には、各地から同センターに届けられた念珠や経本が配られた。

法要では出勤することのできた組内8カ寺の僧侶らのおつとめが響く中、参拝者が焼香。大切な家族や友人などを思いながら静かに手を合わせていた。

ご門主はお言葉で、原発事故の先行きの見えない不安の中で人や地域のつながりが断たれようとしている現状



を案じつつ、お念仏をかく声をかけられた。

いたたく中で「心のつ 自宅が津波で流された僧侶らのおつとめが ながらを保っていた 避難生活を送る梅田薫 響く中、参拝者が焼香。 きたい」と思いを寄せ さん（63・光慶寺門徒） られるとともに、「皆さ は「法要で多くの方々 まのお気持ちを積極的 の深い悲しみを共にし に伝えていただき、私 て、あらためて宗教の たちもできる限りその 大切さを感じた。原発

ご門主はお言葉で、 気持ちを受け取るよう の不安はなくならない に努めていくことから が、お念仏を依りどこ 復興への道も開かれて るとして生きていきたくると思えます」と温 い」、松山組長は「福

島はまだ復興のスタートラインにも立てていないが、規制がある中、避難した人の半分が帰ってきたという。これから帰ってこられる人のためにも、お寺が土台となり『地域の灯台』の役割を担っていきたい。この法要を機縁に、復興のためにできることを自分たちで進めていきたい」と力強く話した。会場では、再会した友人と手を取り涙する姿や、互いに励まし合う人らの輪がいくつもできていた。